

Background information/pictures available online at:

www.toy-worlds-museum-basle.ch

Media, password: swmb

3、000 年の靴の歴史

特別展示 2014 年 10 月 18 日 ～ 2015 年 4 月 6 日

今回の特別展示では何千年にも渡って男性、女性、そして子供たちの足の裏を守ってきた日常のアイテム『靴』に注目してみました。

歴史的な靴のコレクション数では世界一を誇るイギリスのノーサンプトン・シューズ・ミュージアムと協力し 220 足以上の靴が展示されます。3,000 年に渡る足元のファッションをご覧ください。単に足を守るため、そしてファッションのためだけではなく、歴史の上で靴は社会的地位、又は特別なグループに属する立場の人たちと関連してきました。古代エジプトでは、ファラオだけがシルバーやゴールドでできたサンダルを履くことが許されていました。今回の展示で最も古い靴は紀元前 1,000 年のエジプトからのものです。

今日、私たちの履いている靴一足一足には過去とのつながりがあります。歴史の一部を毎日身につけている訳です。また靴はアートの世界でも話題になってきました。この展示会のために世界中のアーティスト 30 名以上が芸術的な靴を制作してくれました。明日へ向かうデザイナーたちが、展示場を訪れる人々を未来の世界へ導きます。

イギリスであらゆる世代向けの特別注文の靴を専門に制作しているトーマス・マーフィー氏が週末に何度か靴制作の実演を予定しています。現代の靴制作の工程を目の前でご覧いただけます。また制作の一部を実際に体験していただくこともできます。

靴の魅力、その機能とフェティシズム

靴は世界中で必要とされています。あらゆる年代の人々の生活のためそして生存のために無くてはならない物です。ファッションと快適さを目的に、常に身につけるアイテムであり、また常に改良も求められます。足を守るために今日の私たちの生活に靴は必要不可欠です。2012年にドイツだけでも100億ユーロという莫大な金額が靴に使われました。年間、一人当たり3-5足の新しい靴を購入した計算になります。

どんな服でも、そこまで人々に影響を与え、感情を揺さぶることはないでしょう。形、色、素材、技、デザイン、価格などが持ち主の人生を語ることがあります。よく、ある人の真実は靴が語るとも言われます。その人の性格、社会的地位、好みを表すことがあるからです。とがったヒールの靴や手製のサンダルが私たちの地位、ライフスタイル、行動や好みを伝えることもあります。

石器時代から女性は収集を男性は狩を担当してきました。だから今の時代でも靴を何足持っているかは男女で異なるのでしょうか。調査によると、20足以上持っているのは女性だと5人に1人、そして男性だと25人に1人となるそうです。

足を守るだけではなく、靴はファッション性という重要な機能も備えています。社会的地位や天候の違いなども反映されることがあります。古代エジプトではファラオだけが金や銀のサンダルの着用を許され、高官と僧侶がサンダルの着用を許されていましたが、一般の人々は裸足で暮らしていました。

紀元前700年頃の古代ギリシャでは、宝石とサンダルの使用に関する条例さえありました。ローマ帝国に於いても、誰が靴を履くことが許され、どんな装飾をしていいかという確かな規則も敷かれていました。

中世にはとがった靴が流行し、その長さが地位を象徴していました。フランス王ルイ14世（1643－1715）の頃、王と高貴な身分の者だけが赤いヒールの靴を履くことができました。

19 世紀終わりから 20 世紀の初めにかけて、男性が高品質の牛革の靴（高級なビジネススーツと一緒に）を身につけることが肉体労働者でないこと、そのような靴を買うことのできる支配層であり、高級なアイテムに気を使っているということを示すようになりました。

人々の単なる履物が地位や富に重要となり、靴をあきらめることは特別な意味に取られ、卑下や後悔のシグナルとなりました。さまざまな文化に於いて神聖な場に近づくときは靴を履かないことが多かったです。宣教や巡礼の際は（厳しい条件のもと）裸足で行われ、地中海地方ではまだその風習が残っています。ドイツに「カノッサの屈辱」という言葉がありますが、これは神聖ローマ皇帝ハインリヒ 4 世が 1077 年冬にローマ教皇グレゴリウス 7 世の元へ裸足で後悔の服をまとい赦しを願いに向かったことを表しています。

靴とは何でしょう？

靴とは足のカバーであり、甲の部分は足の裏を守るための革、木、ゴム、プラスチックなどの堅い底に固定されているものです。甲の部分と底の 2 つの部分に分けることができます。筒の部分はしばしば層になっていて、インナーシャフト（裏地）、ミドルシャフト（芯）、アウターシャフト（つま革）のそれぞれが糊付けまたは縫い合わされています。靴の底は形にも寄りますが、1 枚底（モカシンなど）、中底と表底を合わせたローカットの革のオックスフォードなどがあります。靴底の後ろの部分はたいてい高くなっていてヒールと呼ばれます。

ノーサンプトンミュージアム&アートギャラリー

イギリスのノーサンプトンミュージアム&アートギャラリーは歴史的な靴の収集で知られ、その数も世界一を誇ります。その中から 200 足が選ばれ今回展示されることになりました。最も古いものは紀元前 1,000 年頃の古代エジプトの靴です。特別展示を訪れた人は靴の歴史をたどる旅に出て何世紀もさかのぼり、そして今世紀に戻った気分となることでしょう。12,000 足もの歴史的な靴に加えて、ノーサンプトンミュージアムでは古い工場を再現して靴製造の現場も紹介しています。常設コーナーでは宣伝広告、靴のアクセサリー、靴のケアなどもご覧になれます。大変光栄なことに、今回の特別展示の

ために靴製造で使われた非常に古いベンチや工具などを借りることができました。さらに靴の広告やバックルなどもご覧いただけます。

展示品はノーサンプトンミュージアム&アートギャラリーのキュレーターであるレベッカ・ショークロスさんのご協力を得て選ばれました。この度の大変珍しい特別展示の開催にあたり、彼女の深い知識に感謝致します。専門的な技術のお陰でさまざまな展示品の情報や背景を詳細にお伝えすることができます。

長い年月を経た靴

靴を履くことは人類の特権です。靴の歴史は人類の文化の歴史を反映しているのです。

靴の起源そのものは存在しません。寒い地域では動物の皮で足とふくらはぎを覆っていました。その他の地域では袋のように足の部分だけを覆っていて後にモカシンとなりました。暖かい地域では熱い地面から足の裏を守るために椰子の葉が使われてサンダルの前身となりました。初めて裁断され紐がつけられたのはいつ頃かはわかりません。最初にデザインされたのは約4万年前だと推定されています。現存の最も古い靴は紀元前8,300年頃の繊維を編んだサンダルで北アメリカのパレオインディアンの足をカバーしていたものです。最も古い革の靴はベルンアルプスで作られたものです。たぶん紀元前4,300年頃、新石器時代の山岳民が使っていたものでしょう。

サンダルの歴史はさらに遠くへさかのぼります。初期のものは藁や椰子の葉を編んだもので、エジプトの乾いた土地のおかげで後世へと残されました。古代エジプトに於いて、足をサンダルで覆うことは神、支配者、高官のみに許されたことでした。北部で靴を履いたのは女性が初めでしたが、エジプトでは男性が初めでした。サンダルは地位を示すシンボルだったのです。そして何世紀も経て、エジプトのサンダルの排他性は消え去りました。古代メソポタミア文明でも靴は同じように発展してきました。幅の広い靴やとがった靴など流行の変遷を見ることができます。

かかとの覆われた靴や先が反り返った靴なども存在しました。ギリシャに於いては古代エジプトのようにサンダルを履くことは高い地位を示す象徴でありました。トロイア戦

争の英雄達はみごとなサンダルを履いていました。ギリシャでそういった靴が履かれたのは昔のことだけです。女性や老人達は柔らかく先が覆われた靴を好みました。ハイカーやハンターは東部スタイルのふくらはぎの中ほどまでのブーツや革の紐靴を履いていました。

ローマではギリシャのスタイルを取り入れていましたが、規則はもっと厳しかったようです。皇帝ハドリアヌスの時代(117-138)には上院の議員や女性がサンダルを履いて外出するのは無礼だとされていました。革底の足首をひもで縛った靴は家庭用とされていました。トーガ（ゆるやかな外衣）の他に、足首を覆った靴がローマ人にとって高位の象徴でした。ローマ人の靴は革の底と足首まで覆った革が紐で固定されていました。そして紐の数がその人の地位を表していました。つま先の空いた又は覆われた足首までの靴はトーガを着用したときの外出用の靴として履かれていました。資格によってさまざまなスタイルの足首を覆った靴が着用されました。パトリキと呼ばれたローマの貴族達と後の最高位の者達だけにパトリキ用の靴を履く特権が与えられていました。赤い革製で底は高め、革紐と三日月形のアイボリーの留め具の付いた靴でした。

アウレリアヌス皇帝(270-275)はさらに厳しい規則を発しました。男性は色付きの靴を履くことができず、女性だけが上等の素材を使って真珠や宝石の付いた靴を着用することが許されました。

古代に於いてサンダルが主に着用されていましたが、4世紀の終わりのころになると先の覆われた靴やスリッパスタイルの靴に変わってきました。主にシンプルな茶や黒でしたが、時には紫の革で飾られた物もありました。

ライン川東部のゲルマン人と西部のフランク人の両方が獣皮で作られた原始的な靴を履いていました。民族大移動の頃になると、獣皮や革で作られ、くるぶしまで覆われ縛るタイプの靴に取って代わりました。品質の良い靴は一般人高官と宗教家の高官にのみ着

用されていました。カロリング王朝期（7－10 世紀）には、足とふくらはぎを覆い、つま先の開いた靴が履かれていました。

中世には支配層と貴族社会ではとがったスタイルの靴が一般的に好まれていました。ファッションは時に強調されることがあり、中世後期には特に東洋の影響を受け、また十字軍と関連し、つま先が驚くほどとがった靴もありました。ポーレーンと呼ばれる先のとがった靴が流行し、当時は階級を表していました。パッテンという木製の靴底もポーレーンと一緒に履かれ、外出時に汚れから靴を守ると共に、身長を高く見せることもできました。つま先の長さが、またぐのが難しいほどになると後ろで結ばれることもありました。ポーレーンを履くことを禁止することもありました。1371 年チューリッヒで「男女を問わず、つま先に何か物を入れられるような靴を履いてはならない・・・」という命令が下されました。ヒールと高い靴底の起源はわかっていません。たぶん、あぶみと関係しているか、中世の悪い道で汚れを防ぐためであったのでしょう。靴底の高さは 15 世紀（ルネッサンス）の頃の女性の厚底靴が最高であったでしょう。40 c m くらいの高さの物もあり、ベニスやフローレンスで厚底の靴は大変人気が高かったのですが、歩行には助けが必要でした。使用人や勇ましい男性に脇を抱えられて歩き、かなりのバランスも必要だったでしょう。ベニスやフローレンスの風変わりな女性達がお洒落のために履いた贅沢な厚底靴は、軽い木製の靴底が布や革で覆われていて、高価な装飾が施されていました。しかし「シティオブカナル」の最高会議は行き過ぎたファッションを抑制するようにという規則を発しました。

洗練された男性達は靴のつま先の長さで自尊心を強調する一方、16 世紀後半にはかかとを高くして品位ある印象的な姿を表現しようとししました。そして高いかかとは女性の姿勢を変え、よりセクシーに腰を振って歩いているように見せました。ロングドレスの裾から見える女性の素足の足首も男性を喜ばせました。17 世紀になると、かかとのある靴はヨーロッパ中に広まりました。

バロック時代は、ヒールと靴自体が他の時代と同じように飾られるようになりました。靴の半分がベルベットやシルクで作られ見事な刺繍が施されていたり、留め金で飾られていました。フランス王ルイ 14 世（1643-1715）の頃、女性のヒールは異常なまでに高くなり、歩くときに杖が必要なほどでした。

フランス革命とともに事情は変わりました。貴族のシンボルであった男性靴のバックルと女性靴のハイヒールは絶滅を迎えたのです。新たに、繊細で軽く、ヒールや飾りの無い靴が生まれました。帝国の落ち着いたスタイルのスリッポンシューズです。

高級な布とカラーの革に加えて装飾はわずかに残りました。ゆとりのあったビーダーマイヤー期には、リボンやフリルがつけられました。ヒールが再来したのはロココ時代です。ゴージャスでセクシーな女性用の靴の全盛期でした。18世紀初め、細い脚が女性の美しさの象徴となり、女性の靴もきゃしゃで精巧な作品となりました。裾の広がったスカートの丈も短くなり、スラッとした脚と小さ目の靴がより目立つようになりました。ビーダーマイヤー期の男性には適切でエレガントな服が流行り、その後1世紀に渡り半長靴と言われるショートブーツが履かれました。

古代と中世に考慮されていた足の解剖学的な構造が18,19世紀になって再び考えられるようになりました。1590年代まで靴は左足用と右足用にそれぞれ作られていました。その後かかとが高くなってくると、そのような靴の製造が難しくなりました。そして19世紀初めに、フラットシューズが戻ってきたときに、再び左足、右足用に製造されるようになりました。

整形外科の調査によって現代の靴のスタイルも改良・識別されるようになり、今でも多くの結果が活かされています。チューリッヒ大学で教鞭を取っていたフランクフルトの解剖学者ジョージ・ヘルマン・ボン・メイヤー(1815-1892)がこの整形外科的な改良を導きました。

この時点から、靴のファッションはいい意味で早いペースで変わってきました。靴の販売や製造業者は一つの決まったスタイルの規則から開放されたのです。半世紀後のアーヌボー期には、再び不明瞭さが不足していると考えられました。次世代の人々は長い紐靴を再び好みました。おそらく紐を結ぶ十分な時間と余裕があったのでしょう。新たな素材と装飾も紹介されました。産業化の始まりで、すべての人々が靴を手に入れることができるようになりました。20世紀も20年ほど過ぎると、スカート丈が短くなり、

靴が良く見えるようになりました。以前は隠れていた靴がファッションに影響されるようになったのです。今では形、色、飾りなどもさまざまです。金細工師はバックルに豪華さを与えました。ヒールも高くなり、ラインストーンや宝石で飾られるようになり、金や銀の錦織素材の靴は夜のパーティで欠かせない物となりました。昼間のシンプルな服装には、黒のサテン、木目、ベルベットなどのパンプス、Tストラップパンプス、アンクルブーツが履かれています。皮革製造会社も 1920 年代に金や銀のホイルコートを施した新しい素材を開発しました。

1930 年代にお洒落な女性達は、中ヒール、ハイヒール、ウェッジヒール、プラットフォームなどのエレガントなパンプスを履くようになりました。コルクや木で作られたウェッジヒールやプラットフォームは 1945 年まで流行っていました。1940 年代後半に流行った女性的なラインのスカートに太目の靴底やヒールは似合いませんでした。靴底は薄くなり、ヒールも細くなりました。1950 年代のクラシック風なパステルカラーのパンプスのヒールは約 6 c m で、50 年代終わりにはヒールもより細く高くなり、ついに鉛筆のようなピンヒールとなりました。そのようなのがったヒールに反して、四角いヒールやフラットシューズ、柔らかいバレエシューズなどが若い女性達に好まれました。

1960 年代のミニスカートには、ピンヒールから幅広で低めのパンプスが代わって流行しました。60 年代終わりには、パンプスの流行も去り、ヒッピーファッションがカラフルなサンダルやプラットフォームシューズを呼び戻しました。

1970 年代には、幅広のつま先の平らなウェッジヒールや高いプラットフォームが大流行しました。素材や色もさまざまで、プラスチック製や赤、緑、紫、オレンジなどのプレキシガラスなどが用いられました。この流行に逆らって登場したのが、自然素材を使って足の形に合わせて作られた健康的な靴でした。

1980 年代、ハイヒールやプラットフォームの流行に華やかな色の膝上のブーツ、シンプルな黒のバックルのパンプス、サイドにチャックのあるローカットブーツなどが加わり

ました。フィットネスやジョギング、エアロビックスの人気とともにスニーカーが日常履きから社会でも認められる存在となりました。

今日、靴の多様化によって女性はカクテルドレスにカーボイブーツやスニーカーを履いたり、破れたジーンズにエレガントなハイヒールを履いたりと、どんな靴でも合わせることができます。そして今日私たちの履いているすべての靴は過去との繋がりがあるのです。

子供の靴

靴の履き方は、貧しい人と豊かな人、田舎の人と都会の人で異なるだけではなく、子供と大人でも異なります。20 世紀初めまで、都会の子供たちも夏の暖かい時期は裸足で過ごしていました。多くの場合、洗礼を受けたら長いズボンと靴を履くようになっていました。

昔から、ベビーシューズは幸運の印と考えられていました。子供たちがたいてい 1-2 歳の頃に初めの一步を踏み出す靴でした。現存する古い子供の靴は 19 世紀の物で、柔らかな革製で、当時人気のあったバックルストラップが付いています。麻やサテンで作られた子供靴もあります。主に裕福な家庭で使われていて刺繍や美しい装飾が施されています。年齢や社会的地位に関わらず、19 世紀の子供靴は当時の大人の靴と同じように左右対称という特徴を備えていました。左と右の靴の形が同じだったということです。靴を長い間履いた場合は、靴に足の形が残ります。しかしこのような“履き慣らし”は足に良いはずがありません。特にまだ骨が発達中の子供にとっては足のゆがみにつながります。長い間このような慣習が続いた後、1900 年代になって初めて靴は左右別々にペアとして作られるようになりました。新たな靴の形に慣れるのには美と物質的な観点を至急考え直す必要がありました。職人も工場も根本的な制作方法を変えなくてはなりませんでした。靴文化の 50 年に渡る対立の後、靴は左右別々のペアとして勝ち残りました。

特別展示では、過去数百年の子供の靴の展示も行います。イギリスのノーサンプトンミュージアム&アートギャラリーからの出品です。

靴とアート

靴には創造性も求められます。靴産業に於いて、とっぴなデザインが流行ってきたのはつい最近のことです。芸術と工芸と製造の境界線は無くなってきました。国際的なアーティストと靴職人は靴の社会的かつ創作的な見地から再三刺激を受けてきました。着用性に関わらず、ファッショナブルな日常のアイテムは彼らの手によってユニークで目を見張るような、また挑発的で風変わりな作品に仕上げられたのです。

時を越えて、靴はファッションの世界だけではなく芸術の世界にも加わりました。ただ単なら日常アイテムから、靴は 20 世紀初頭にダダイズムと超現実主義の芸術活動の世界に参加したのです。今でも刺激を求めています。過去と現在のアーティスト達は靴は芸術的対立のための的確な手段であることを証明しました。現代芸術の世界で靴は、我々の増加する消費また楽しみを追及する社会を映し、あざ笑い、増強し、批判しているのです。

リサ・スヌークと靴のバーチャルミュージアム

靴を芸術作品として収集するリサ・スヌークは見事な靴のバーチャルミュージアムを展開します。コレクションが大きな輪だとすると、輪の中にある物はわかりませんが、輪の外はまだ誰にもわかりません。従って新しい芸術作品、新しいデザインが加わるたびに輪は大きくなっているのです。デザイナー、建築家、ゲームデザイナー、アーティスト、グラフィックアーティストとして靴のデザインに参加しました。新たな素材、展望、芸術的アプローチで常に新しいテーマを追求しています。

靴のバーチャルミュージアムの使命は、これって本当に靴なの？履けるの？と言った質問で靴の真髄を尋ねることです。仮想の領域で判断の基準は存在しません。増え続けるコレクションのための単なる要素なのです。バーチャルミュージアムには展示、展示ケース、パネル、倉庫、防犯設備、空調、保険も必要ありません。建物や開催時間も存在しません。リサ・スヌークの靴のバーチャルミュージアムは 1 年中 24 時間営業です。どなたでも新たな発見を楽しむことができます。

靴のバーチャルミュージアムがオープンして 10 年以上になります。実際の靴のコレクションを友人や来場者にデジタルで方式で紹介してきました。靴の記事、ポストカード、本、お土産、バービーの靴、クロッグ、ダンスシューズ、映画に登場した靴、オズの魔

法使いでドロシーが履いたルビーのサンダル、ジェーン・フォンダのシルバースニーカーなども含まれていました。25 年以上に渡って収集されたコレクションは棚一杯になって、ついにバーチャルスペース（仮想空間）へ移されました。リサ・スヌークはアイテムをカテゴリーに分類し、それぞれの繋がりを考え直しました。彼女のパートナーであるタコ・ズワンスイックと、構造や発見の経路を交えたバーチャルミュージアムの地図を完成させました。コレクションのことを色々考えているうちにバーチャルミュージアムの可能性に気付きました。多くのデザイナーやアーティストの手助けも得ました。2004 年のオープン以来、支援者や来場者は増え続けています。

数年前、靴のバーチャルミュージアムは実際の展示会への参加を求められました。実在の世界からの招待は、新たな関係を新たな枠の中で広げました。ドイツではライブチヒの Grassi 応用美術ミュージアム、ウルムの Villa Rot ミュージアム、ウィーンの SHOEtting Stars in the KUNST HAUS WIEN など、リサ・スヌークは新たな領域に参入しました。いくつかのミュージアムと仕事をする中で会う機会の無かっただろう人とのつながりもでき、バーチャルミュージアムの完成の多大な助けとなりました。調査や協力の土体となったのです。若手のデザイナーやアーティストが自分達の道を見出し、素晴らしい作品をバーチャルミュージアムへ提供するようになりました。これからも新しい参入が続きます。靴のバーチャルミュージアムを益々楽しんでいただけることでしょう。

リサ・スヌークさんと靴のバーチャルミュージアムのお陰で、世界中から 30 名以上の有名アーティスト、制作者、デザイナーの 40 以上の作品をご紹介しますことができます。ロンドンの Zaha Hadid、Valentini Argyropoulou、オランダの Iris van Herpen、アメリカの Omar Angel Perez さんらの作品も含まれています。

靴デザインの将来もご覧いただけます。靴とおもちゃをテーマに展示されます。オランダ、ユトレヒトのオランダ・シュール・アカデミーの学生の論文をもとにバーゼルミュージアムのために創られたものです。Playmobil®, Lego®, Perler® beads and puzzles などが靴と言う形を表現し、驚くような作品になりました。

ベルギー、シント・ニコラースのアカデミー・オブ・ファインアーツのファッション靴デザイン課の卒業生の作品も展示されます。アカデミーではパートタイムコース、第 2

学位、パートまたはフルタイムの追加コースを提供しています。高度な学習に加えてデザイン、工芸、素材や歴史背景などを学ぶことができます。

靴の職人工芸

靴を作るための工具で古いものは 35,000 年前の物があります。最後の氷河期に洞窟に住んでいた人たちが寒さから足を守らなくてはならなかったのでしょうか。靴の製造は他の工芸に比べると比較的簡単に学べ、高い特別な工具も必要としなかったと言われます。その為、18 世紀には靴製造が工芸分野で大きく発展しました。中世には、バーゼルを含めヨーロッパ全土で 1,250 もの靴製造ギルド(組合)が誕生しました。

靴職人となるには、若者は 7 年間の奉公の後、傑作を制作しなくてはなりません。靴職人は裕福であることもあり、17 世紀のロンドンの靴職人で 60 人もの職人を抱えている人もいました。靴を作るための工具、付きぎり、ペンチ、ナイフ、革を打つ鉄などは何世紀もの間変わっていません。

カスタムメイドとレディメイドの靴（特注品と既製品）

19 世紀半ばまで靴のほぼ全てがカスタム・メイドでした。注文主の希望に沿って職人が靴を作っていました。毎回新しい足形が作られたわけではなく、足に調度フィットする足型を選んで制作していました。足形は普通体型の人が普通の姿勢でいるときの足のイメージを立体的にしたものです。作ろうとしている靴の形、サイズ、つま先の長さ、かかとの形などの特徴を考慮して作られました。

カスタムメイド（特注品）の靴

カスタムメイドの靴は整形の靴と通常の靴とを識別するもので無くではありません。特注の整形靴は、特別な医学的指示に基づいて専門的に作られます。それに対して昔のカスタムメイドと呼ばれる靴は、履く人の好みやサイズに合わせて作られました。今日、国際化の進む中、オンラインで靴の予約注文を受ける会社もあります。オンラインのフォームに足のサイズを記入すると、そのデータを基に足型が形成されます。そして足型に合わせて靴が手作りされるわけです。このような特注の靴の価格は靴産業に於いて大変高価となっています。

ヨーロッパで特注の靴を作る良い職人は少なくなってきました。競争があつてこそ素晴らしい作品が誕生するからです。ミラノ、パリ、ベニス、ロンドンそしてノーサンプトンなどの都市は、まさにそれに値するでしょう。これらの都市は真の靴生産の町であり、世界でも名の知れた特注の靴メーカーがあります。

もちろんカスタムメイドに技術を注いできた靴職人は存在します。イギリスはリッチモンドのトーマス・マーフィーがその一人です。2002年にロンドンのコードウェイナーカレッジを卒業後、自分のスタジオを開き技術を磨きました。そして Boudicca、Robert Cary-Williams、Ann-Sofie Back たちのファッションショーの靴をデザイン、制作しました。

2007年トーマス・マーフィーは、名祖としてブランドを立ち上げ世界中のブティックで靴の販売を始めました。彼の女性用の靴は銅製のヒールがトレードマークになっていて、自然に酸化して青緑にうすく光ります。現在は由緒あるロンドンのロイヤルカレッジオブアートで講師を務め、ロンドンのファッション界のために豪華な靴を開発製造しています。

近頃、トーマス・マーフィーは妻のフェイのブランド、チャプター2を創設しました。4歳から10歳までの子供用の現代的で豪華なユニセックスの靴を紹介しています。ブランドは、品質、独自性、職人技のすべてを証明しています。すべての靴はロンドンの彼のスタジオで制作されています。

トーマス・マーフィーはスタジオでクラスも教えています。自分の古い靴を彼の指導で好きな靴に作り直すことができます。非常に楽しく感動することでしょう。

トーマス・マーフィーは履き主の性格を表すような長持ちする靴を創りたいと思っています。持続可能であることが重要なのです。今回の展示では、一定の週末に彼の技術を目の前で見るチャンスもあります。

レディメードシューズ（既製の靴）

19世紀中頃、アメリカで需要に追いつくために靴の工業生産用の機械が初めて開発されました。数十年後には手作りのカスタムシューズに代わり、大量生産の靴が登場しました。数年後、ヨーロッパでも同じような開発が行われました。人々は注文した靴が出来上がるのを待たずに、既製の靴をすぐに購入できるようになりました。種類も豊富で、買う前に欲しい靴を探して試すことができるようになったのです。手作りの靴と同等クラスの品質の靴を安く買うことができるようになりました。

何よりも、手作りの靴の出来栄は靴職人の基準によってまちまちだったのに比べて、大量生産によって常に品質の良い靴が出来上がるようになりました。大量生産は職人の猛烈な反対にあいましたが、この開発を止めることはできませんでした。靴は簡単に手に入る商品になったのです。高く贅沢なアイテムではなくなりました。今まで木釘を打った靴しか履けなかった人々も縫い合わせた靴が買えるようになりました。大量生産の場合、標準サイズと言うものが必要になります。英国の靴のサイズは14世紀から存在しましたが、新しいサイズは加えられていませんでした。パリのサイズのような大陸サイズには半や4分の1のサイズもありました。標準サイズに努力が注がれましたが、換算が常に正確ではないし、今日でも靴の長さや幅の違った標準サイズが存在します。

お伽噺、習慣、慣用語

足と靴は多くの昔からの習慣や神話、お伽噺、民話に重要な役割で登場します。靴の無い者は、たいていパンも食べられない役で何度もお伽噺に出てきます。アンデルセンの「マッチ売りの少女」には典型的な貧しい子供が登場しますが、貧しさは足元から描かれています。破れた靴を履いていたり裸足の場合も、通常つらい人生を象徴しています。

田舎に住む人と都会に住む人の違いも何を履いているか履いていないかで決められることがあります。グリム童話の「旅歩きの二人の職人」二人の仕立て屋が靴職人に会います。二人とも都会を旅しています。靴職人は「小さな巣では何も得ることができないし、田舎では裸足で暮らしている」と言います。「長靴をはいた猫」（1967）でも猫はピカピカの靴に感謝して紳士のように扱われます。

グリム童話で上流社会で履かれていた赤い靴がよく登場します。アンデルセン童話では有名な「赤い靴」（1845）では赤い靴が悲劇を演じます。カレンという女の子は赤い革靴がお気に入りです。正装式にも履いて行きました。ある日、罰として靴を履いたまま踊り続けるようになってしまいました。そしてついには両足を切断することになったのです。不自由な体となりましたが、償いとして天国へ召されると言うお話です。

このようなお話は、きれいで特別でおしゃれだった靴はあまり好評を得ないということも伝えてあります。グリムの「水牛の革の長靴」の中で兵士が森の中で見知らぬ人に「君はきれいな靴を履いているがだいぶ黒くなっている。もし私のように旅をしようとしたら、靴は長持ちしないだろう。私の靴を見たまえ、水牛の革の靴でもう長いこと履いている」と言います。靴は丈夫で頑丈でなければなりません。良い職人が作ったあつらえの靴は生涯履けるということです。

ファンタジー溢れる童話には、弱者が強者に勝てる魔法の靴も登場します。ヴィルヘルム・ハウフの「ストーリー・オブ・リトルマック」には、優しいけれどどこか不運な少年が登場し、いつも大きすぎる服を着ています。大きなスリッパを履くと風のスピードでどこへも行かれるのです。ついに王立の走者となります。しかし結局は、この世からいなくなりスリッパの行方もわからなくなるのです。たぶんあつという間にどこへでも行けるのは良いことではなかったのでしょう。靴がお話に登場するとき、女性の靴のほうが男性より多く出てきます。実際の生活でも女性の方がより靴に関わっているせいでしょうか。加えるなら、靴の艶麗さも女性の小物として役割を果たしています。

今日の宣伝でもこのような役割を果たしています。グリム兄弟の「シンデレラ」を思いつくでしょう。美しい靴は美しい女性を象徴し、その靴を履く女性も美しくなくてはならないのです。当時の社会的理論も反映されています。中身の美しさという観念を少し

も理解していません。美しい靴は男性がその靴を美しい女性に履かせたいという気持ちを呼び起こします。昔の習慣で靴が婚約のプレゼントとされたのも、この様な役割を靴が果たしていたからでしょう。

他の有名な話として「The Shoes that were Danced to Pieces」や「The Seven League Boots」などがあります。「オズの魔法使い」の中のドロシーのルビーレッドの靴も有名です。

足と靴に関連するドイツの言い回しに“誰かの上に靴で立つ”という表現があって、所有や支配を意味します。同じく、狩の古い習慣として殺した獲物の上に足を乗せることも所有や支配を意味します。その他の知られた表現として、「世界は足元にある」「誰かの靴を履く（つまり誰かの代わりをする）」「足場を得る」「二本足で立つ」「自分の足で立つ（自力で）」「両足を地面につける」「靴紐のように暮す（細々と暮す）」「誰かの靴を舐める（お世辞を使う）」「誰かの靴に足を入れてみる（その人の気持ちになる）」「手と足に仕える（身の回りの世話をする）」「古い靴のように心地よい」「誰かを靴で蹴る（追い出す）」などがあります。

特別展示では、誰もが靴の魅力的な世界を楽しむことができます。

展示会での催し

特別展示では、靴制作を紹介する短編フィルムなども上演されます。週末には子供たちが自分でゴムぞうりをデザインしてお土産に持って帰ることのできるワークショップが行われることもあります。

イギリスのトーマス・マーフィーによる実演も予定しています。ご来場の方々も今日どのようにカスタムシューズが作られるかをご覧ください、その一部を体験することもできます。

詳細

開館時間

ミュージアム、ショップ、レストラン

毎日 10:00-18:00

トイワールドミュージアムではスイスミュージアム共通パス及び Museums-PASS-Musées がご利用いただけます。

入場料

CHF 7.00/5.00

大人が同伴の場合 16 歳以下の子供は無料

追加料金無しで特別展示をご覧ください。

全館車椅子で移動できます。

メディア連絡先

詳細は以下へお問い合わせください：

Laura Sinanovitch

Managing Director/Curator

Toy Worlds Museum Basle

Spielzeug Welten Museum Basel

Steinenvorstadt 1

CH-4051 Basel

Telephone +41 (0)61 225 95 95

sina@swm-basel.ch

www.swmb.museum

Background information/pictures available online at:

Media, password: swmb